



住吉教会 2015 年度テーマ
「殉教者の霊性を生きる」
—信仰刷新の年—

幼子とられた神

傘木澄男神父

毎年クリスマスは「キリスト教信仰とは何か」を考える大切な時です。クリスマスは幼子誕生の物語に止まらず、幼子が成長してその使命を果たしていかれる、救い主イエスの物語です。神の愛と隣人愛、敵をも愛する愛を生き抜かれ、そのために人々から理解されず、却って憎まれ拒まれて終には十字架に付けられて殺されるイエスのご生涯の全体が、クリスマスの物語なのです。

とは言え、クリスマスは私たちの目と心を馬小屋の飼い葉桶に眠る一人の幼子に引きつけ、そこに釘づけにして止みません。なぜ神はこのようにして世に来られる道を選ばれたのだろうか、そしてその幼子は私たちに何を告げているのだろうか、と考えていると、思い浮かぶのは、幼子のように神は誰にも力を振るわず、脅しも抑えつけもなさらないということです。その無邪気さと優しさ、無力さと傷つきやすさは、人の心を和らげて招き入れ、その人の内なる最善のものを呼び覚ましてくれます。赤ちゃんがいると人は言葉や動作に気を付けます。赤ちゃんは何もしないで大人を打ち負かしてしまいます。その無力さの中の何かが人を圧倒してしまうのです。それこそまさに神様のなさり方です。そしてそれがクリスマスのメッセージです。クリスマスの力は赤ちゃんの力です。どんな腕力や権力にも勝る力です。

私たちは余りにも長くこのことが理解できないできました。幾多の世紀の間人々が待望してきたメシアは権力を振るって悪人たちを打ち倒し、悪の世を浄めるスーパーヒーロー的な人物と考えられていました。洗礼者ヨハネさえそうでした。彼の関心は正義と悔い改めと禁欲で、民衆には決算の時は近づいたと警告し、メシアも同じ使命を持って来られると期待していました。ですからイエスが平和を説き、罪びとを優しく招いておられると知らされた時、彼は躓いたのです。私たちが理解に遅く、洗礼者ヨハネのように真理と正義を切望する余り、どうしても権力や腕力をもって悪を打ち負かすメシアを求めてしまうのです。でもそれはクリスマスの物語でも、そこに啓示された力でもありません。ベトレヘムの飼い葉桶に寝かされた幼子は、誰にも立ち向かわず、ただそこに横になり、善人も悪人も誰もが近寄ってきて、その無力さを見つめて心の琴線に触れるものを感じ取ってくれるのを、じっと待っています。神様はそのようにして私たちとの出会いを持ちたいと、今も望んでおられるのではないのでしょうか。(以上)